【メルディア】一般財団法人メルディア 広報誌

MELDIA

FREE
VOL.62
JUL.2024

「善は悪に勝つ」

人に〝与える〟大切さを映画を通して伝えたい

一般財団法人メルディア 小池 信三代表理事
SPECIAL INTERVIEW

寄り添ったトータルサポートを目指して8年

絵本が生み出す“触れ合いの時間”を、たくさんの人に届けたい

インクルーシブな絵本屋さん

PRESENT

A ペア4組様

映画
「わたしのかあさん」
上映特別招待券

B 5名様

監督サイン入り
「わたしのかあさん」パンフレット

C 3名様

オリジナルコースター
※デザインは選べません

D 3名様

「ぺったんこ」「ゆーらんゆーらん」
「がたがたどんどん」
しょうじあいか（著）※種類は選べません

E 2名様

クリアファイル＆ステッカー
※絵柄は選べません

F 1名様

キーホルダー
（サムエルコッキング苑）

G 3名様

りく君のイラスト　※種類は選べません

H 3名様

『ぼくたちのことをわすれないで
ロヒンギャの男の子
ハールンのものがたり』
由美村嬉々（木村美幸）・作　鈴木まもる・絵

応募方法

下のQRコード※から必要事項をご記入の上、ご応募ください。当選者の発表は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。

8月31日（土）締切

CONTENTS VOL.62

MELDIA 2024 JUL

04 「善は悪に勝つ」
人に〝与える〟大切さを映画を通して伝えたい

07 130年以上続く想いを紡ぎながら
利用者がその人らしい生活を送れる環境を目指す

10 絵本が生み出す“触れ合いの時間”を、たくさんの人に届けたい
インクルーシブな絵本屋さん

13 SPECIAL INTERVIEW
寄り添ったトータルサポートを目指して8年

16 障がいを乗り越え二児の母に!
周りの人に支えられて、子育て奮闘中

18 おさんぽ DE 楽しむ！
～江の島の昼と夜、隠れスポットを散策しよう～

20 りくですよチャンネルが行く！
都心で楽しめる釣り堀で魚釣りに挑戦!

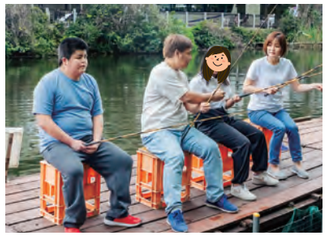
22 美幸先生とたのしむミラクル絵本ツアー VOL.8

24 メルディア トータルサポート 上野ってなぁに？

26 32歳になった息子の成長に対する喜びと、今を楽しむ大切さ
水越けいこ M Size はじまり Again

28 マクドナルドのチャレンジクルーになった
ダウン症の高校生

30 MELDIA フォトコンテスト



お問い合わせはこちら

一般財団法人 メルディア
Meldia Foundation

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-5-22セキサクビル7F
一般財団法人メルディア 宛て
TEL：03-6302-1871　MAIL：org@mlda.jp

ホームページ
一般財団法人 メルディアのホームページでは当財団の取り組みやイベント情報を掲載しています。X(旧Twitter)では湘南ベルマーレ観戦チケットプレゼントやスポーツ支援情報を発信しています。是非、ご覧ください。

X(旧Twitter)
https://twitter.com/gf_meldia

ホームページ
https://mlda.jp

カウンセリングルーム メルディア ウェルネス

カウンセリングのご予約は WEBまたはお電話で。

住　　所：東京都新宿区大久保2-5-22セキサクビル7F
アクセス：都営大江戸線・東京メトロ副都心線「東新宿駅」から徒歩3分、JR山手線「新大久保駅」から徒歩8分
電　　話：03-6302-1871
営業時間：11:00～20:00(カウンセリングは12:00～20:00)　日・月休み
https://mlda.jp/counseling/
完全予約制：電話もしくはHPから予約
料　　金：1セッション(60分)6,000円
ただし、ご家族・お子さま・ご兄弟の療育手帳もしくは精神障害者保健福祉手帳のご提示で、ご提示いただいた回から無料(何度でも)
※ご家族の方のみ、または、障がいをお持ちの方の同行も可能です。ただし、障がいのある方のみのカウンセリングは有料となります。

メルディア ウェルネス
MELDIA WELLNESS

vol.62 MELDIA 2024 JUL.
発行元／一般財団法人 メルディア
広報誌MELDIA Vol.62／2024年7月25日発行

本誌の無断転載・複製を禁じます。
2017-2024©All Rights Reserved.

一般財団法人 メルディア／広報誌MELDIA

無料定期購読のお申し込みはこちらから

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。

次号予告
MELDIA vol.63
2024年9月25日 発刊予定

一般財団法人 メルディア
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-5-22
セキサクビル7F
一般財団法人 メルディア
TEL:03-6302-1871

「善は悪に勝つ」人に〝与える〟大切さを映画を通して伝えたい

福祉映画や反戦・男女参画をテーマにした作品を制作・公開し、90歳を超えてもなお自らメガホンを握り続ける山田火砂子監督。今年3月より、両親が知的障がい者の娘目線で語られる親子愛に溢れる映画「わたしのかあさん―天使の詩―」を公開しています。彼女が映画を撮る原動力は何なのか、話を伺いました。

知的障がいのある長女を育てながら時代を駆け抜けてきた

映画のプロデューサーを長年務め、64歳で監督業に乗り出した山田火砂子監督には、知的障がいのある長女がいます。「私には、もう60歳を過ぎているけれど、知的障がいのある娘がいます。彼女が生まれた当時、60年前の日本には今のような福祉制度は整っていなくて、障害基礎年金制度や知的障がい者のための教育制度が十分でない時代。戦後はまだそういう時代だったんですよね。そういう時代に、社会的に立場の弱い子どもを育てるわけだから、お金もかかるし、様々な苦しさから親子心中してしまう人たちもたくさんいました」と、当時のことを教えてくれる山田監督。

「当時は知的障がい者のための学校と言ったって、数える位しかなくて、そこへみんなが押し掛けるから、1人の先生が子どもを山ほど抱えていました。なんとか受かって入れた学校で出会った先生がいて、その方が今回の映画の原作『わたしの母さん』の著者・菊地澄子先生でした。娘にもすごく優しくしてくれて、かわいいかわいいと追いかけまわしてくれて、『いつか先生の本を映画にするからね』なんて言っていたことを今回実現することができました」と話します。

子どもたちには笑いの溢れる家庭で育ってほしい

今回の映画で伝えたいことを伺うと、「原作では、主人公の子ども・高子の世界を描いていて、障がい者の母は嫌だと言うけれど、だんだんと周りの人のお説教や色んなものを見聞きする中で、母も父も障がいのある1人の人間だって理解していくところで終わっているのだけど、より色んな人に見てもらうために、映画では高子が大人になった部分も描いています。高子の子ども時代の家は、都営の住宅をイメージして、実は私の住んでいるマンションで一部屋空いたところを借りて作りました。作り出した生活の場で、ささやかに暮らす子ども達の成長過程を、現代の人たちに見せてやろうと貧乏映画を作ったんです。最近は戦後の貧しさを知らない人ばかりになってきているので、今回の映画のテーマの一つですね、『貧乏またこれ楽しい』と。

それを伝えるシーンの一つに、食卓のシーンがあります。高子の友達は医者の娘で豊かな家庭。高子の家とダイニングも全然違うわけです。でもそこで、1人侘しく夕飯を食べている女の子のシーンから、高子の母を演じる寺島しのぶさんがわーっと騒いで家族で食卓を囲むシーンがあって。豊かさとはお金が全てじゃない、こんな〝笑い〟のある食卓で子どもたちに育ってほしいですね。お客さんからも『このシーン良かった』と声を頂きました。他にもこんなシーンが良かったと、アンケートを取ったら山のように来て嬉しいです」。

映画のシーンで出てくる高子が描いた"みにくいアヒルの子"のイラスト。他に、劇中のイラストの一部は監督のお孫さんが描いたものが使われていたそう。

「私が立ち上がらなくては」と乗り出した監督業

では、山田監督の映画制作に対するパワーの源は何でしょうか。「芸能の走りを始めたのは、『ウエスタン・ローズ』というバンドに参加したことがきっかけです。そこから舞台女優を経て、子どもが生まれて。再婚した夫が大プロデューサーだったので、映画制作に携わり始めました。映画を作りたいなら、外国映画のことも知った方がいいと、入り浸っていた教会で外国文化についても勉強していましたね。

私がプロデューサー協会に入ったと

女性バンド「ウエスタン・ローズ」でギターを弾いていた山田監督（写真左下）

©2024 現代ぷろだくしょん

きは、女性は石井ふく子さんと私だけでした。撮影や美術に関する協会もあるけれど、沢山あるそれらの映画関係の協会でも、女性会員が全くと言っていいほどいない状況でした。時代の先頭を走らなきゃいけない表現分野に女性がいない。これはひどいと思っていました。〝そうだ、私が立ち上がらないといけない〟と、主人と映画を使って運動していこうと決意しました」。

女性の自立を訴えたいという熱い想いがあることがメガホンを取り続ける理由だと語ります。「そういった理由から尊敬する女性を題材にしたり、今回は、障がい者の母という難しい題材を取り上げて、その役に寺島しのぶさんをキャスティングしました。直接お手紙を書いてオファーしたところ、快く返事をいただけました」。

報いを望むのではなく、人に与えていく生き方を

長女は現在施設に入っているということですが、娘には散々尽くしたから後悔はありませんと語る山田監督。「娘たちを色んなところに連れて行きました。『裸の大将』を撮っていた時は娘2人を連れて撮影現場に行って、子どもたちの面倒を見ながら撮影して、列車の弁当売りの役で女優としても出演したりして。その時は列車でそのまま次の駅まで子どもたちと行ってもクルーがなかなか迎えに来てくれなくて、お腹減ったねえなんて話したりしましたね」と、娘さんとのエピソードも色々教えてくれました。「私が伝えたいことは、一つ。〝善は悪に勝つ〟、そして〝望まないで、人に与えよ〟という言葉が好きで、そういう生き方をする人たちがどんなに幸せであるかということを見せてもらったので、それを伝えたい。知的障がい児を持つ母でもあった、作家のパールバックの言葉に影響され、私は映画を作ってそれを世に発信するという役割を与えられたと思っています。みんなと一緒になって社会に訴え続けて、やがて障害年金も出るようになり、世の中が変わっていきました。映画を作って騒ぐことが私の使命だと思って、これからも映画を作り続けます」と、力強い言葉で語る山田監督の姿に、衰えることを知らないエネルギーをひしひしと感じました。

計9名様 PRESENT

Ⓐ映画「わたしのかあさん」上映特別招待券ペア4組様
Ⓑ山田火砂子監督サイン入り
「わたしのかあさん」パンフレット　5名様

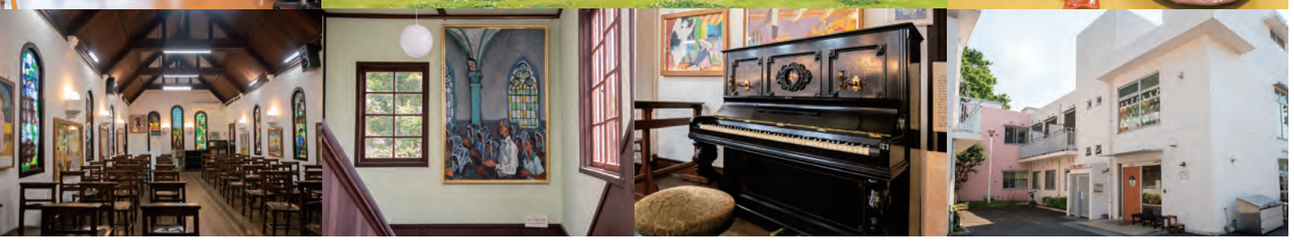
詳しくは3ページ

山田 火砂子
ウエスタンバンド、舞台女優、映画プロデューサーとして活躍後、70代で実写映画の監督としてデビュー。知的障がいのある長女を持つ。

株式会社現代ぷろだくしょん
1951年創立。戦後の独立プロ・ブームで立ち上げられた映画製作会社。近年は福祉映画を多数制作・配給しており、過去作品に岡山孤児院を創立した石井十次をモデルにした「石井のおとうさんありがとう」や知的障がい児のために奔走した石井筆子の生涯を描いた「筆子その愛―天使のピアノ―」等がある。

映画「わたしのかあさん」　全国の市民ホール等で上映中！
2024/7/30(火) なかのZERO視聴覚ホール(東京都)
2024/8/1(木)　茅ヶ崎市民文化会館小ホール(神奈川県)
2024/8/3(土)　ルネこだいら(小平市民文化会館)レセプションホール(東京都)　等

詳しくは上映スケジュールをチェック！
https://www.gendaipro.jp/mymom/theater.html



130年以上続く想いを紡ぎながら
利用者がその人らしい生活を送れる環境を目指す

国立市に緑あふれる環境の中で入所施設や地域移行支援サービスを運営する「滝乃川学園」があります。総合施設長の乾さんに、広大な敷地にある各施設と滝乃川学園の歴史、施設運営として目指す姿についてお話を伺いました。

創設者の想いを継ぎ、「人のためにやれることは何でもやろう」

日本初の知的障がい児のための福祉施設として設立した滝乃川学園。創設者の石井亮一氏は「救いを求める人に手をさしのべることは、私たちのなすべきつとめである」というキリスト教の精神を掲げ、130年以上続く今もその精神を引き継ぎ、事業を展開しています。乾さんは「私たちには『私たちは滝乃川学園を利用する全ての人の豊かな生活を支えます。そのことが私自身の心の豊かさに繋がると信じて働いています』という理念があります。これにより、家族経営でもない中で学園長や理事長が代々変わっていっても、職員は『人のためにやれることは何でもやろう』と、ここまでやってきています」と話します。求められることはやれる限りやっていこうという想いが根本にあるため、元々は児童の施設だったスタートから、児童が成人しても住める・働ける場として成人部ができ、さらに、時代の流れから地域で生活するためのグループホームができました。また、施設に入所していなくても重度の障がいがあり困っている人がいるのであれば、短期入所や居宅支援、放課後等デイサービスなど、その人に合った支援を提供できる環境・体制を歴史の中でその都度整えていきました。

入所している人たちに〝その人らしく〟生活してほしい

これらの複合的な施設を運営できる理由は、敷地の広さにもあります。敷地面積は約7，000坪で、「都内にしては珍しく敷地が広いので、例えば成人部の入所の利用者さんだと、生活する建物とは別の建物に移動して〝出勤する〟ということができるので、利用者さんもオンとオフが生まれる。職住分離というところが良い環境だと思います。日中活動との切り替えが分かりやすいんです。雨の日なら長靴を履いて傘をさしてカッパを着て、という風に」と語ります。

入所の方は知的障がい者が多く、児童は定員30名、成人部の入所は定員80名、グループホームは国立市・立川市内に10住居あります。そして、敷地内に認知症対応型のグループホームがあり、地域にお住まいの方の利用が多い中、今は2名程知的障がいのある高齢の方が利用されているそう。

「敷地の広さ、自然の豊かさもありますが、利用者さんと職員たちの空気感が良いと言ってくださる方も多いです。就職説明会で各施設の様子を見て、空気感の良さから就職を希望したいという声もあり、そこは嬉しいです。入所の利用者さんは自ら望んでここに来た人はいないと私は思っています。児童部からそのまま成人部に入所した方や、地域で生活していたけれど親御さんが高齢になり入所した方、元々はグループホームにいた方など様々な方が入所されています。だからこそ、その人たちが少しでもその人らしく生活できるようにということを大切にしています」。

施設を施設っぽくしたくない

では、その人らしい生活ができるように、どういう工夫があるのでしょうか。「施設というと1日の流れは決まっていて、施設で完結できてしまいます。ご飯は出るし、お風呂は入れるし、難なく1日は終わる。でも、『施設を施設っぽくしたくない』と思っています。決まったスケジュールがあるとどうしても自分のペースではなくなります。時間通りに物事が進んでいきます。我慢しないといけないことが多いと思うのですが、施設だからしょうがないにはしたくないんです。なので、それぞれの人がそれぞれの人らしく新たな経験ができるように、土日には散歩やドライブに行く、近くのコンビニや買い物に行く、月1回はお出かけをする。また、最近は少しずつコロナ禍で実施できなかった個別の旅行も復活しています。特に、児童部では東北など遠方にも行きます。

子どもの頃の経験は、人生においてとても重要だと思うので、様々な経験をしてほしいのです。他にも園内で〝ものの市〟というイベントを2年前からやっています。地域に協力いただき、多摩地区の作業所のバザー出店をしたり、礼拝堂でコンサートをしたり、園庭で野外バンドをしたり、キッチンカーを呼んだりと、敷地全体がお祭りのようになるんです。近くに住んでいても入ったことが無かったという地域の方もこのイベントをきっかけに来てくださいます。石井が求めていた〝地域に開かれた〟施設を目指しています」。

まだまだ求められることにチャレンジする滝乃川学園

「来年、滝乃川学園は初めて国立・立川の地から離れて新宿に事業所をオープンする予定です。『求められたらやるのが私たちの使命だよね』とチャレンジしています。また、20代 30代の若手職員も増えてきたので、彼らが挑戦できる場としても作れたらと考えています」と乾さん。今後も変わらぬ精神を持ちながら支援サービスを開拓していくのでしょう。

最後に、障がい者の子を持つ親御さんの将来の選択肢について問うと、「昔よりも利用者さんの選択できる幅は広がってきています。ただ、入所に対するハードルが高かったり、住む部屋が狭かったり、グループホームも入所施設も様々なので人によって合う合わないがあります。まずは様々な施設を見学していただくことをおすすめします。

滝乃川学園では入所エントリーの前に1回は見学していただき、ありのままを見ていただくようお伝えしています。グループホームに移って生活する利用者さんの話を聞くと、入所と違う自由さを改めて感じます。やはり地域で生活してその人らしさを体感することは良いことだと分かるので、入所においても知的障がいだからという理由でその人らしさを見ずに接することがないようにあったらいいなと思います」と福祉の未来を想いながら聞かせてくださいました。

映画「わたしのかあさん」の撮影に使用された場所の一つ「木華橋」。施設内には重要文化財も多数。

3名様 PRESENT

オリジナルコースター
※デザインは選べません
詳しくは3ページ

乾　晶子さん

アルバイトをした際に、知的障がい者の方たちとの触れ合いが楽しいと感じ、以来30年近く滝乃川学園にて従事。現在、支援部門の総合施設長として日々利用者の方と触れ合いながら生活を支えている。

社会福祉法人滝乃川学園

日本初の知的障がい児のための福祉施設として1891年設立。以来、利用者を取り巻く課題などに合わせてサービスを拡充しながら様々な支援活動を行っている。
https://www.takinogawagakuen.jp/

絵本が生み出す
“触れ合いの時間”を、
たくさんの人に届けたい

絵本屋だっこ

インクルーシブな絵本屋さん

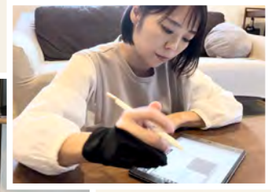
絵本の読み聞かせ動画や保護者の方が社会と繋がれる場を提供するなど多岐にわたり活動中の「絵本屋だっこ」。北海道を拠点に絵本作りを通じて障がい児支援をしたいと様々なサービスを展開する、代表・しょうじあいかさんにお話を聞きました。

障がい理解を広めたいという想いから

絵本屋だっこを始めたきっかけは、「2023年2月に全国の障がい者施設に絵本を配るクラウドファンディング（以下、クラファン）を行ったのですが、その準備をする中で生まれた構想が〝絵本屋だっこ〟でした。絵本をただ配るだけでなく、その先にどんな未来があるのか提示した方が良いとアドバイスを頂いて、〝何か障がい児支援に繋がる一つの発信源になる場所を作ったら、個人ではできないようなこともできるのではないか〟と思って作った場です」。そう語るのは、ご自身の長男が結節性硬化症という難病をもつ、しょうじあいかさん。言語理解が難しい息子さんにも読んであげられる絵本を作りたいと、インクルーシブ絵本作家として活動しています。メインの取り組みは、絵本の売上を活用した絵本配布で、絵本を届けることで障がいについて知ってもらう機会を増やしていくこと。「私は元々前に出るタイプではなかったのですが、突き動かされるようにクラファンに挑戦しました。すると、思った以上にたくさんの応援を頂けて、おかげさまで目標に対して300％超で達成することができました。本当にありがたくて、気持ちにお返ししたい、できることをちゃんと続けていこうと、皆さんの存在が原動力になっています」。

絵本には答えではなく、〝何だろう〟と考えるストーリーを

絵本とはどのように作られているのでしょうか。絵本作りで大切にしていることについてしょうじさんに伺うと、「まず、必ず絵本のテーマを設定します。どのような年齢で、どのような状態の方にどういうことを届けたいか。例えば、私は自分の息子に向けた絵本を作るので、〝できるようになってほしいこと〟など、そういう願いも込めたテーマで作っています。〝見る練習にする絵本〟にしよう、〝触れ合いを楽しめる絵本〟にしよう、〝耳から楽しめる絵本〟にしようという風にテーマを設定します。息子は最重度で知的障がいがあり、言語理解も全くない状態で、基本的にそういった方を対象にした障がい児向け絵本という感じになっています。近頃は障がい理解のための絵本も作っていて、ストーリーへの共感を大切にしつつも、答えを提示しすぎず、ストーリーの中で読者自身に考えてもらえるようにしています。〝障がいって何だろう。普通って何だろう〟、そういうところを考えてもらえるようなストーリー構成にしています」と話します。



絵本の制作風景。絵本を通じて障がい理解を広めたいと奮闘するしょうじさん。

活動スタートのきっかけ、クラファンでは障がい児施設などにも多数配られた。

制作した中でも特に印象深い作品は「ぼくのにぃに」だそう。「この絵本は私の中で特別で、我が家をモデルにしたような絵本になっています。作家を始めて最初の8冊ほどは息子のための絵本を作っていたのですが、その後に思い立って作ったのがこの絵本です。長男の2歳下に妹がいるのですが、彼女の体験をベースにしたストーリーで、きょうだい児目線で、障がい児のいる家庭を描いたものです。制作時、まずは障がい児のいる家庭を知ってもらいたいと、〝読み聞かせ動画〟を作り、絵本は欲しい人がいれば買えればいいかなと考えていたのですが、動画の公開後に思った以上に反響があり、それこそ同じような家庭の方は『もう涙が止まらなかった』などとても共感してくださって、絵本を通じて障がいへの理解を広めていくことが使命だと感じた一冊でした」と話します。

保護者も社会と繋がれる場を作り、家族支援も

現在、法人を二つ立ち上げながら、両者の特性をいかした包括的な障がい児支援のための組織作りをしている絵本屋だっこ。息子さんの名前を付けた合同会社と、準備中のNPO法人の二軸で絵本屋だっこを支えていきたいと考えているそうです。

「絵本屋だっこでは家族向けの相談室も設けています。障がい児の保護者の方がお仕事の場として、社会と繋がれる場として、学校や社会の中で役立てる場として、活用いただいています。困ったときには相談できる場所があるということを知ってもらえたらと思います。ただ、全て無償で続けることは難しいので、ワンコイン勉強会という500円で参加できるオンライン勉強会の取り組みを毎月1～4回開催しています。目的は相談室の運営費の確保です。また、勉強会にはカウンセラーの方やインクルーシブ保育を実践されている保育園の保育士の方など、私の活動に共感してくださる方がほぼボランティアの形で協力してくださっています」と協力の大きさを語ります。そして、様々な活動の運営は32

これまでにしょうじさん自身で日本語版15冊、英語版11冊を制作。他にも障がい者アーティストの作品や、寄付作品など多数の絵本を販売している。

名ほどのサポーターグループの方々がともに支えているとのことです。

本軸の絵本の活動では、参加型の企画を実施して絵本化したり、英語版の絵本を広めたいという展望があるそう。「現在は様々な方からお声がけいただいて、コラボレーションで絵本を作っていることも多いですが、年に1冊は絵本屋だっことして絵本を作りたいなと思っています。昨年は〝みんなでたっちー!〟という絵本を作りました。障がいのある子もそうでない子も、誰でも応募OKでお写真を頂き、皆さんの似顔絵から絵本を作るというような企画でした。英語版については、障がい者アーティストの英語版作品をゆくゆくは海外の方にも広めるための手法を模索中です」。

様々な活動を展開する絵本屋だっこ。

たくさん抱っこして触れ合って、絵本を読み聞かせてあげてほしい

「息子は自閉傾向が強く、人にあまり興味がなく、1人でずっと同じおもちゃで遊んでいるような感じなんです。関わっていこうとするとやめろという風に言われるような子なのですが、私が絵本を作ったぐらいから少し人に興味を持ち始めて、絵本もそれまで全然興味がなかったのに興味を持ってくれるようになりました。歌と揺れは昔から好きで、絵本にもそういう要素を入れていて、歌と一緒に触れ合い遊びをすると触るのも受け入れてくれるんです」と、息子さんについて教えてくれるしょうじさん。「絵本育児に憧れながらも、なかなか絵本に興味を持ってくれなかったのですが、息子と同じように少しずつでも絵本に興味を持ってくれたり、逃げないでいてくれるようなお子さんでしたら、とにかくたくさん抱っこして、触れ合って、絵本を読み聞かせてあげてほしいです。目に見えていなくても、必ず心は成長し、お子さんにも、そして読み手である大人にも、心に愛と幸せが溢れていくはずです。読み聞かせを幸せを作るツールとして、ぜひ積極的に取り入れてほしいです。もちろん、以前の私の息子のように、全然見向きもしないというときは、今はそのときではないのかもしれません。それぞれ興味や成長のタイミングはありますが、絵本が触れ合いのツールになれば嬉しいです」。〝見る〟ことに興味がなくても、歌や触れ合い遊びのような形でも楽しめるしょうじさんの絵本。本という媒体が無くても、触れ合い遊びとして本の内容を生活の中に取り入れることから始められるようです。保護者の方向けの絵本も多数あるので、ぜひ公式サイトやYouTubeをチェックしてみてくださいね。

3名様 PRESENT

「ぺったんこ」
「ゆーらんゆーらん」
「がたがたどんどん」
しょうじあいか（著）
※種類は選べません。

D

詳しくは3ページ

しょうじあいか

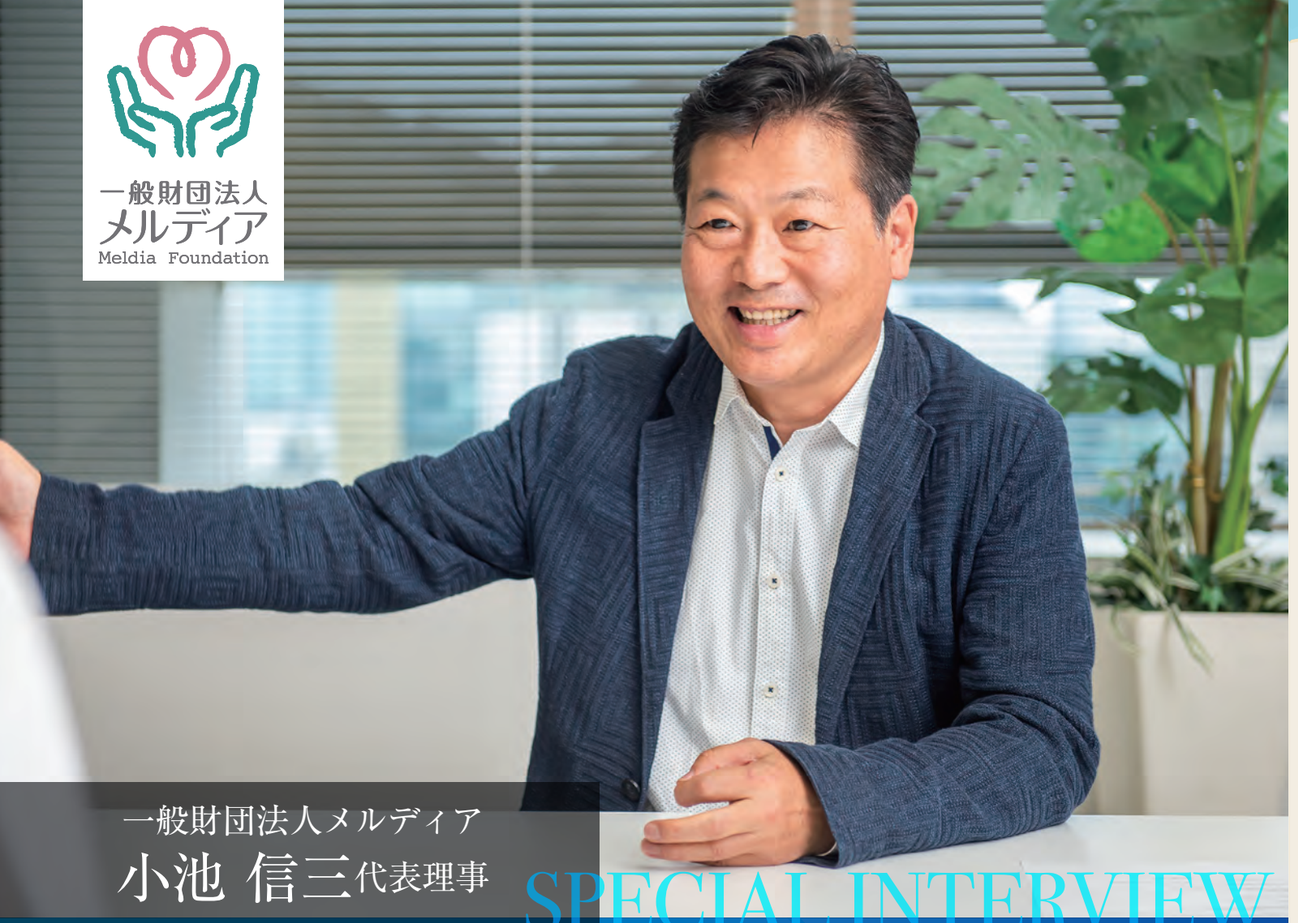
絵本屋だっこ代表兼インクルーシブ絵本作家。3児の母。幼稚園教諭として3年間勤務後、障がい者グループホームでのパート勤務などを経て現在に至る。子どもの頃好きだった絵本は『めっきらもっきらどおんどん』。

絵本屋だっこ

2023年4月設立。障がいがあってもなくても楽しめる、インクルーシブな絵本を多数取り揃える。絵本の売り上げを障がい児支援に活用している。

公式サイト
https://dakko-ehon.com/

読み聞かせ動画はこちらをチェック！
https://www.youtube.com/channel/UCq1WcBUlks5ArJ0Q0XVCUsA



一般財団法人メルディア
Meldia Foundation

一般財団法人メルディア
小池 信三代表理事

SPECIAL INTERVIEW

寄り添ったトータルサポートを目指して8年

「知的障がいのある人から目を背けない、温かい社会にしていきたい」、そう話すのは一般財団法人メルディアの代表理事を務める小池信三。当事者だけではなく、悩みを抱えるご家族を支えるための活動を行おうと、様々な事業を展開してきました。財団設立から8年目。今回、満を持して広報誌メルディアにて自身の想いを語ります。

障がいのある子どもを育てる家庭に〝何か協力できないか?〟

小池代表理事　財団の理事の一人である水越けいこさんとの出会いが財団設立のきっかけでした。シンガーソングライターとして活躍される彼女が子育てに奮闘していると、詳しく話を聞くとお子さんはダウン症があり、シングルマザーとして育てている。障がいのある子を母親1人で育てる家庭が多いと彼女は言いました。片親ですと、働ける時間も少なく、生活的にも苦しい状況が多くあることは容易に想像できます。そういった方々を支える活動や仕組みがあればいいのではないかと、障がい者支援、特に知的障がいのある子どものいるご家庭を支援し始めました。役立つ情報を発信したり、同じ悩みを持つ親御さんたちに情報交換の場を提供したり、そういうコミュニケーションの場を作ることが目的です。

広報誌メルディアは2017年11月から発行し続けていますが、読者の方からは「色々な情報を得られました」「心の支えになりました」という感謝のメッセージをこれまでにたくさん頂きました。毎月のアンケートには目を通していて、そういった声を見ると、財団をやっててよかったなと思います。もう一つの青少年スポーツ支援事業では、その奨学制度を

使ってプロになった選手もいます。夢を掴むのは本人の努力ですが、その一助になれているということも嬉しく思います。そういう風に、支援していることが届いている、形になっていると感じる瞬間は財団の存在意義を強く感じます。

8年目のメルディア。現在の支援活動は？

永野事務局長　財団の目的、小池の想いを受け事業として様々な活動を実施してきました。財団は設立から8年目となり、活動の幅も広がってきました。現在、広報誌の他にも次の事業を行っています。

働きたい障がい者のための、就労移行支援事業所メルディアトータルサポート上野での直接支援を行っています。

障がいの有無に関わらず、親が子に願う事の一つに、社会に出て自立した生活を営んで欲しいという事があると思っています。ただ、障がいがある場合はスムーズに就職活動を行い社会に出る事が難しいことが多いことも事実です。我々の財団でもそこにフォーカスし就労移行支援という枠組みを活用して、1人でも多くの方が社会に出て自立した生活を送れるようサポートしています。

また、家族の頑張りを支えるためのカウンセリングルーム メルディアウェルネスを設置しました。

広報誌の取材活動を通して、様々な方のお話を伺う中で、障がいのある子と日々接している多くの親御さんは「きちんとしなくては」「泣き言を言ってる場合ではない」とご自身を鼓舞しながら日々を送られていると感じました。カウンセリングや相談で全てが解決するわけではありませんが、気を張らずに過ごし、自身の話をし、気持ちが落ち着く空間を提供できればと考えカウンセリングサービスを提供しています。

そして、青少年スポーツ支援。

プロを目指す青少年たちが的確な環境で才能を評価されプレイを続けられるよう支援しています。特に首都圏や大阪ではユース育成が手厚いクラブチームが多数ありますが、そういった場で全国の実力のある子たちが経験を積める機会を提供したい、と事業を行っています。この奨学制度で現在3名がプロサッカー選手となり、うち1名はオリンピック日本代表候補にまでなっています。

医療支援や施設拡充など さらに直接的な支援を目指して

小池代表理事　今後も、知的障がい児・者のいる家庭のためになる情報、なかでも薬や医療関係について発信していきたいです。過去にも広報誌で新しい研究結果や薬の話について取り上げさせていただきました。多くの親御さんは、子どもともっとコミュニケーションを取れるようになりたいと考えていると思います。そこに繋がる何か新しい希望を持てるような情報を知ることができれば、

過去に実施した障がいのある人もない人も楽しめる「メルディアフェスタ」

親御さんも安心すると思いますし、少しでも状況が改善するように、より多くの情報を提供することが一番重要だと考えています。子どもの成人後や親なきあとなど、将来的な不安もたくさんあると思います。それらに対しての法的な話や、公的な支援も今後変わっていくと思いますし、そういった情報も掘り下げて届けられたら悩んでいる方々のためになるのではないかと思っています。

より直接的な支援という意味では、独自の医療機関を財団として持ちたいという思いや、ショートステイができる施設を拡充したいと考えています。ショートステイは、片親の方や、きょうだいがいる家庭など、子育てされている本人が体調が悪くなったり、子を世話できない状況になったときに一時的に使える施設がたくさんあればと思い、検討をしています。また、大きな声を出しても大丈夫なレストランなど、気負いせず外出ができるような場もつくっていきたいですね。

より多くの人が〝目を向ける〟、温かい社会に

小池代表理事　世の中には様々な支援がありますが、個人的にはもっと知的障がいに対する支援や理解が広がってほしいと思っています。私は、知的障がい支援をしたいと私財をなげうって財団をやっています。しかし、知的障がいというものは、〝障がいがある〟、〝助けが必要〟ということを当事者が社会に伝えることがあまりできないという特性があるせいか、なかなかマスコミにもスポットが当たりません。支援しても、支援になっているのか分かりづらいという面もあるかもしれませんが…。しかし、当事者のことだけでなく、親御さんが困っていることを共有したり、頑張っている親御さんがたくさんいることをもっと知ってもらえれば、社会に対する知的障がいへの誤解を解くことにもつながるはずです。目の見えない方が歩いていたら荷物を持ってあげる、車椅子で困っている人がいたら車椅子を押してあげる、そういうちょっとした手助けと同じように、電車で知的障がい者が大きな声を出していたら、何か困っていないかとまずは見守ってほしい。何をすればいいか分からない、とその場から立ち去るのではなく、小さい子どもを見守るように、目を背けない。知的障がい者に偏見を持たない社会になるよう、少しでも力になっていきたいです。ぜひ、読者の皆さんの知りたい情報を遠慮なく教えてくださいね。

永野事務局長　最後に、現在、財団では障がい者支援事業とスポーツ支援事業の二つの事業をより大きく展開し、より多くの方へサポートを届けたいと考えています。小池の話にもありましたが、今後新たな試みとして医療分野での貢献、福祉施設の拡充など、我々の力でできることは多くあると考えていて、企業、団体、個人問わずにご賛同いただける、ご連携いただける方を募っています。

広報誌を常設設置していただける、周囲の方にお配りいただける、広告を出稿いただける、福祉事業として連携が出来る、ご寄付をいただき財団の事業に参加いただける、どんな形でも構いません。多くの方の賛同、支えをいただければ、より広い支援活動が出来ると考えています。

財団の活動にご賛同いただける方はぜひご連絡いただければ嬉しいです。

一般財団法人メルディア
事務局長　永野 周平